

国指定史跡

金山城跡



群馬県太田市教育委員会文化財課

山城

2



城は城でも「山城」です

日本のお城というと大坂城や姫路城のような、「天守閣」を持った城を思い浮かべる人が多いと思いますが、それらはほとんどが江戸時代に建てられたものです。「天守閣」は「権威の象徴」として、また「物見」の役割を持つもので、この頃のお城は流通経済を重視して平地に造られました。天守閣を持つ城は、織田信長の時代に造られたと言われています。

金山城は、天守閣を持つ城

よりも古い時代(1469年)に造られた城でした。

それでは、金山城は当時どのような城だったのでしょうか。金山城は「山城」という種類の城です。「山城」では、急峻な斜面や岩盤を巧みに利用し、柵を巡らせたり、土を盛って土塁を築いたり、岩盤を削って堀を掘ったり、石を積んで石垣を造るなどしました。

金山城は、金山全体の自然地形を利用しながらさらに手を加え「巨大な要塞」として、外敵からの侵攻を防いでいた

のです。

現在の金山山頂部、新田神社のある場所は、実城（本丸）と呼ばれ、当時金山城主がいた場所であると考えられています。織田信長の時代よりも約100年前に築城された金山城には天守閣はなかったと考えられますが、天守閣に替わるような重層の建物が建っていたかもしれません。

それでは、発掘調査に基づく整備により往時の姿を取り戻しつつある金山城を見ていきましょう。



実城で見つかった瓦

城郭用語

●縄張りなわばり

城郭の設計・計画のこと。曲輪や虎口の位置、土塁、堀切などの防御施設の配置を言う。

●曲輪くるわ

「郭」とも書く。城の位置する地形によっても異なるが、丘陵や尾根を切り盛りして土塁や柵、堀で囲み居を構えた平場を言う。

●虎口こぐち

城や曲輪への出入口の構えを言う。防御と攻撃の両方の機能を備えた施設として中世に創意工夫された。単なる門としての出入口から、土塁を巡らせたり喰い違いにしたりした。

●土塁どるい

土居とも言う。曲輪などのまわりに巡らす防御施設。土を高く盛って、その上に柵や堀をまわしたものが一般的である。

●堀切ほりきり

堀には水を入れた水堀と掘っただけの空堀がある。堀切は山城に使われている堀で、尾根を断ち切って簡単に通行できないようにした曲輪を守る施設である。

金山城の歴史

金山城は、文明元年（1469）に新田（岩松）家純の命により築城されました（『松陰私語』）。その後、岩松氏の重臣であった横瀬氏（後の由良氏）が下剋上により実質上の金山城主となり、全盛を築きました。

越後上杉氏、甲斐武田氏、相模小田原北条氏など有力戦国大名の抗争の狭間にあった上野（こうずけ）で、金山城主由良氏は、上杉氏や小田原北条氏との従属関係を保ちながら生き残りを図りました。その間、金山城下は10数回もの攻撃を受けますが、金山城は一度も城の中核にまで攻め込まれず、その堅固さを誇りました。ところが、天正12年（1584）金山城は小田原北条氏の謀略により直接支配下に入り、天正18年（1590）、豊臣秀吉の小田原北条氏討伐により廃城となりました。

金山城の縄張りとその変遷

金山城は、金山山頂から樹根状に延びる尾根部を中心に縄張りされた、核となる四つの主要部からなる山城です。金山城の主要部を山頂部の実城域とし、北方の北城域、西方の西城域、南方の八王子山

ノ砦域があり、大小の堀切によって分断されています。その広さはほぼ金山全山の約300haに及びます。

金山城の縄張りは、当初の城普請が70日余りと記録されていることから、一時期に完成したのではなく、大きく四つの時期に拡張されていった変遷を見ることが出来ます。

第一段階…金山城の築城は金山山頂を中心とした一部の空間で工事が行われ、実城、二ノ丸、三ノ丸程度の規模だったと考えられています。第一期は、築城時からの初期段階で、日常の生活空間である館と山城がまだ一体化していない段階と考えられます。

第二段階…山城と日常空間とが一体化し、本城として拡張されていく時期と考えられています。金山城の内乱として明応4年（1495）に起こった明応の乱では『松陰私語』の記事に「真城」（実城）と「中城」の存在が明記されています。この「中城」は、馬場曲輪、馬場下周辺に当てること出来るのではないかと考えられています。このころの金山城の縄張りは、南方が御台所曲輪、南曲輪とその帯曲輪、西方が馬場曲輪、馬場下を含めて物見台下堀切まで広がったと考えられます。



第三段階…金山城が有力戦国大名により戦災を頻繁に受けて、修築がしばしば行われた時期で、永禄9年（1566）から天正12年（1584）の小田原北条氏に金山城を明け渡すまでと考えられています。

第四段階…小田原北条氏の支配下時代と考えられています。金山城では、西城域西端の見附出丸や八王子山ノ砦から尾

根伝いに延びる二重土塁と堀切などに小田原北条氏特有の縄張りが顕著に見られます。これらは、この第四期における普請になるものと考えられています。

以上のように、金山城は改修、縄張りの拡張を重ねて、今に伝えられる規模の山城になったのです。



西から実城を望む全景



実城域全景（南より）

復元



金山城を復元する

4

金山城は天正18年(1590)、小田原北条氏の滅亡により、廃城になりました。このとき、土塁や通路など城の主要な施設は破壊されてしまいました(これを「破城」といいます)。

風雨にさらされた金山城跡は、多量の土砂によって埋没し、樹木が生い茂り、城であった頃の威容さが覆い隠されてしまいました。江戸時代の金山は、「献上松茸」の御林として、当時の役人の厳しい管理下に置かれました。しかし、このことにより、幸いにも金山城の遺構はさらなる破壊を逃れ、現在に残されるに至ったと言えます。

その後、金山城跡は、昭和9年(1934)に金山山頂付近の18.3haが国の史跡として

指定を受け、憩いの場として親しまれていました。

平成7年(1995)より、史跡の保護や、歴史学習及び憩いの場として、史跡の積極的な活用を図るために『金山城跡環境整備事業』がスタートしました。この事業は、城の遺構を調査し、その調査結果等に基づいて、城の土塁や通路などを復元整備するもので、遺構を取り巻く周辺環境も併せて整備しています。

それでは、調査から復元整備へ至るプロセスを見てみることにしましょう。

当時を復元するにあたっては『元禄太田金山図』や『松蔭私語』『長楽寺永禄日記』などの絵図や文献も大きな手がかりとなっています。



『元禄太田金山絵図』



松蔭私語



①



③



②



④

整備前の金山城跡

- ① 大手虎口 (西から)
- ② 月ノ池 (南から)
- ③ 馬場曲輪・馬場下通路 (東から)
- ④ 物見台・物見台下堀切 (南西から)

1 金山城を調査する

古絵図や古文書などの文献調査、現場での測量調査や発掘調査などを行いました。また、周辺の環境を把握するために花粉分析や植物調査なども行いました。



『金山城跡植物調査報告書』



発掘調査風景



日ノ池で行った物理探査

4 整備方法を検討する

発掘調査結果だけでなく、周辺の環境なども踏まえて、整備方法を検討していきました。

▶ 古い時期の土塁石垣が見つかったので露出展示しました。



▶ 土塁に生えているケヤキを残して整備しました。



2 金山城を記録する

発掘で見つかった通路や土塁などを測量図や写真によって記録し、復元整備のためのデータとしました。

▶ 発掘調査で見つかった石垣を測量しました。



5 金山城跡を復元する

発掘調査で見つかったオリジナルの遺構を、可能な限り保護あるいは利用するようにして、金山城跡を復元しました。また、説明板・案内板なども設置しました。



オリジナルの石垣の上に、石工さんが1個ずつ新しい石を積んでゆきます。

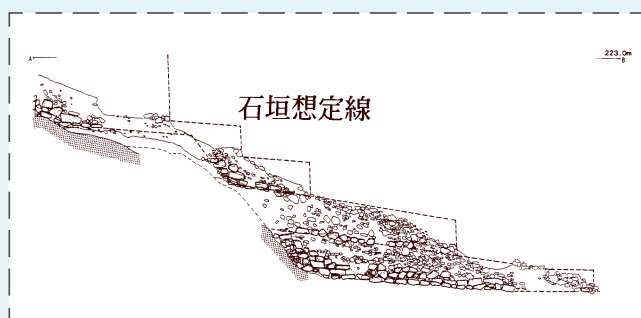
3 金山城をイメージする

記録した図面をもとに、通路の幅や石垣の高さなどを想定しました。

▶ ベニヤ板を石垣に見立てて、土塁に貼ってみることで石垣の高さをイメージしました。



積石材の間に鉛板を挟むなどして、オリジナルの石と新しく積んだ石を区別しました。



記録した測量図から、石垣の高さなどを想定してみました。



日ノ池石敷きは新しい石で被覆しましたが、一部オリジナルが見えるようにしました。

見張る

見張るー物見台

物見台は、馬場から西城にかけての尾根筋で最も高い所に位置し、物見台からは南の太田口と北の長手口の両方の谷を含めて金山城の周囲が良く見渡せます。また、ここからは、北から西にかけての眺望が抜群で、遠くは赤城山、榛名山、妙義山、浅間山までも一望することができます。金山城は越後の上杉謙信や甲斐の武田勝頼などから攻撃を受けており、物見台では北西方向から侵攻するであろう、上杉氏や武田氏の動向を「見

張り」、その攻撃に備えていたのでしょう。物見台からは、青銅製の火縄銃の弾丸が7点出土しており、敵兵の侵攻に備えていた様子がうかがえます。

死 角

上杉謙信は、金山城を攻める際に、物見台からの死角となる藤阿久方面に陣を構えました。



物見台には、調査で確認された柱穴の位置を表示した「遺構表示施設」を造りましたが、これは物見矢倉を復元した施設ではありません。



物見台

物見台の基壇は、自然の地形に沿って等脚台形の形に石積みされています。中央には石階段が確認されました。



柱穴跡

物見台基壇の中央には、物見矢倉が建っていたと考えられる柱穴が4穴確認されました。(写真は基壇東半部の柱穴)



馬場曲輪北半柱穴群

調査では3時期の生活面が確認され、一番新しい時期(廃城時)では3棟の建物が配置されていました。(㊸調査時写真)

堀切 — 通行を遮断する

堀切とは、敵兵が尾根づたいに侵攻してくるのを防ぐために人工的に造られた谷で、山城にとっては重要な防御施設です。

西矢倉台西堀切は、西城から実城までの間にある4つの堀切のうち、一番西城よりに

ある堀切です。発掘調査によってこの堀切には石敷きが施され通路として使われていたことがわかりました。堀切の北側には柱穴もあったことから、敵の侵入を防ぐための柵が造られていたと思われます。

また、堀切が終わる南端部

には斜面に沿って柱穴列が並んで確認されたため、木製の橋（栈道）が設置されていたと考えられます。

西矢倉台下堀切は西から二番目の堀切です。比較的小さな堀切ですが、西側が3.4m、東側が7.4mの深さがあり、敵の侵入を阻んでいます。

さえぎ

遮る

西矢倉台西堀切

西矢倉台下堀切



栈道

大堀切

三ノ丸下にある大堀切は、金山城の中でも主要な防御拠点である大手虎口の目前にあるため、掘り幅・深さともに最大の大きさを誇っています。

また、堀の中央部には通行を妨げる堀止といわれる石積みも造られています。



大堀切（上）と堀止（右）



大堀切

馬場曲輪

月ノ池

惑わす―「迷路」

馬場下通路

金山城を攻める敵兵になった気持ちで当時の通路を歩いてみましょう。

①～⑦の写真と場所を確認しながら読んでください

①まず、石敷き通路を歩いて行くと、正面にまるで敵兵を待ち受けるかのように基壇状石積みが立ちはだかります。敵兵はその威圧感に圧倒されたことでしょう。

②基壇状石積みを目前にすると、左脇に石積みされた「土橋」が堀切に架かっていることに気付きます。「土橋」を渡ろうとすると、正面にある2つの基壇状石積みから集中的に攻撃を受けることになります。基壇状石積みの間には「門」があったと考えられ、堅固な造りになっています。

③基壇状石積みの間を通過すると、石敷きされた通路の幅が急激に狭くなります。敵兵の侵攻を妨げるために、通路幅も意図的に狭めていたのです。

④通路を進むと右脇には通路に並行して土塁石垣が築かれています。谷側から攻めようとする敵を見張ると共に敵を威嚇していたかのようです。さらに通路を進むと堅堀が眼下に出現し、左には堅堀に架かる「木橋」が、正面には堅

堀へ降りる石階段があることに気付きます。通路はここで二方向に分岐しています。

⑤「木橋」を渡ると、正面には基壇状石積みが両脇に築かれ、ここにも「門」があったと考えられます。

⑥基壇状石積みの間を通過すると、左側に礎石建物址と右側の柵列に挟まれ、そのまま進むと通路は北上の馬場通路への連絡道へと続いています。

⑦さらにこの先では掘立柱建物址も確認されていますが、通路は「行き止まり」になっています。

このように馬場下通路は、まるで「迷路」のような構造だったことがわかります。

物見台下土橋から最終地点の「行き止まり」に至るまで馬場下通路を歩いてみると、敵を「惑わす」ための工夫や堅固な造りが随所に見られ、複雑な通路だったことがわかります。



④「分岐する通路」
堅堀に降りる階段と堅堀に架かる木橋（東より）



①「威圧する基壇状石積み」
西矢倉台通路から東を望む（西より）



②「見張りと攻撃」
土橋と2つの基壇状石積み（南西



惑わす



⑥「馬場通路への連絡」
礎石建物址(左)と柵列に挟まれた通路
(西より)



⑦「行き止まり」
掘立柱建建物(左)と柵列(右)
(西より)



③「通路幅の変化」
土塁石垣と並行する通路(西より)



⑤「木橋と2つの基壇状石積み」
(西より)



①北側(左側)岩盤の凹凸という自然の地形を利用して、石敷きされた通路幅を意図的に変えており、敵が多数で一気に侵攻することを防ぐ工夫であったことがわかります。(③「通路幅の変化」調査時写真)

②南側(右側)では石敷き通路が、北側(左側)岩盤斜面際では建物の礎石が確認されました。この礎石建物址は、敵兵に備え

た兵士が待機していた「番小屋」だったと考えられています。(⑥「馬場通路への連絡」調査時の写真)

③馬場下通路の東端で約70cmの高さの石積みが見つかりました。この石積みは、当時約1.5mの高さだったことがわかり、馬場下通路がこの石積みで行き止まりになっています。(⑦「行き止まり」の東端部)

おど
嚇す

威厳と威嚇— 見せるための大手虎口

月ノ池の脇を通ると、大手虎口の入口が見えてきます。大手虎口は、石積みや曲輪、土塁石垣によって、奥にある実城（現在の新田神社）へ向かうための通路を厳重に守っていた一大防御拠点であったと考えられます。

これらの石垣や土塁は、発掘調査結果をもとに往時の大手虎口の姿を復元したものです。高い石積みや土塁を両側に築いた強固な城門、見張りの兵士…。往時に思いを馳せ

れば、この大手虎口が、来る者を威圧し続けてきたことは、現在の私たちにも想像できるのではないのでしょうか。

さて、大手虎口の中へ入ってみましょう。向かって右にカーブした通路が延びていますが、その行く手には威厳さえ漂う強固な土塁石垣が立ちだかっています。この通路の先はいったいどこへ向かっているのか…。一瞬不安になりますが、これも敵を欺くための効果なのでしょう。通路は、正面に見える土塁石垣の

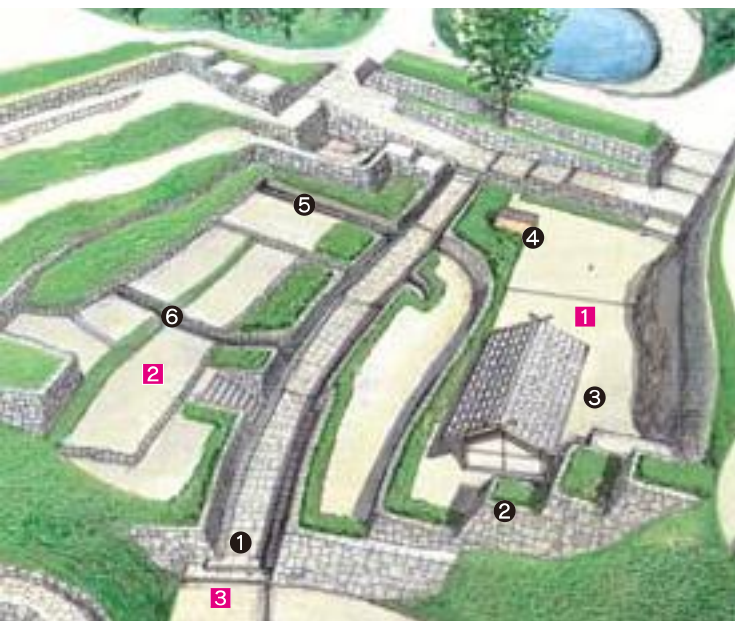
手前で「鉤の手」に折れて延びています。敵に大手虎口を簡単に突破させないための工夫であると考えられます。敵兵がこの通路を通れば、その巧妙さに翻弄されたことでしょうし、招かれた客人であれば大手虎口の見事さに目を奪われたことでしょう。

大手虎口は単なる防御拠点であるだけでなく、敵に対しては「威嚇」を、味方に対しては「威厳」を示すという、「見せるための空間」であったともいえます。

大手虎口（西より）



大手虎口入口の礎石



- 1 虎口南上段曲輪
- 2 虎口北下段曲輪
- 3 大手虎口

生活空間

大手虎口は、防御拠点や「見せるための」空間といった性格の他に、生活の間でもあったことが明らかとなりました。南上段曲輪では、石組み井戸址、石敷き建物址（火薬庫?）、カマド址などが見つかっています。往時の兵士たちは、長い籠城生活の中での飢えや乾きを癒し、戦闘に備えていたのかもしれません。



南上段曲輪

暮らす



復元されたカマド

水とのたたかい

大手虎口の段状土塁では、5回もの改修工事を行った跡が見られます（土塁露出展示施設）。では、なぜ頻繁に改修工事を行わなければならなかったのでしょうか。

この謎を解く鍵は、大手虎口の立地する「谷地形」と「水」にあると考えられています。つまり、大手虎口は雨水が集まってくる谷にあるため、せっかく築き上げた石垣も、その後ろから差しくる水の圧力によって崩壊してしまうのです。おそらく幾度もの土塁改修の理由には、こうした地形と、排水処理の問題が絡んでいるものと考えられます。しかし、往時の人々は手をこまねいて見ていた訳で

はありませんでした。

改修工事が行われた土塁をくわしく見ると、新しく造った土塁ほど折れ曲がっていることや、石垣下端を15cm～20cm手前に据えて積み上げる「アゴ止め石」技法が用いられていることなど、改修されるたびに石垣が補強されて

いることがわかります。また、大手虎口の中を走る石組み排水路は、雨水を効率よく排出させるための工夫であったと考えられます。往時の城を維持するための工夫の一端が、この大手虎口で垣間見ることができるのです。



大手虎口の土塁

保つ



①中央通路・門

中央通路の入口付近では川原石の門礎石が見つかりました。

②南上段曲輪土塁石垣

中央通路南脇に高くそびえる土塁石垣が見つかりました。

③石敷き建物址

南上段曲輪では石敷きされた建物の基礎が見つかりました。武器庫を兼ねた詰め所であると考えられます。

④石組み井戸址

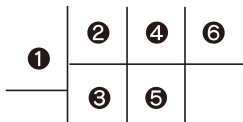
南上段曲輪で見つかった井戸址には、底付近に木の井戸杵がしっかりとめ込まれていました。

⑤改修工事の痕跡が見つかった土塁

より丈夫な土塁を造るために、5回もの改修工事をおこなった痕跡が見つかりました。

⑥石組み排水路

雨水を効率よく排出するための石組み排水路が見つかりました。



聖なる水

12



聖なる池一日ノ池

大手虎口をぬけると、一変して視界が開け、美しい池が見えてきます。「日ノ池」と呼ばれるこの池は、発掘調査の結果、戦国時代からの「貯水池」であることがわかりました。

山頂にわざわざ池を造ったのは、長い籠城に耐えられるよう、生活水を確保するためのものだと考えられています。水を集めやすい谷頭に、この池を造った当時の人々の知恵

に驚かされます。

石垣と石敷きに囲まれたこの池の両端に石組み井戸址が2か所ありました。ではなぜ、大きな池があるにもかかわらず井戸を二つも造ったのでしょうか？

金山城築城よりもずっと昔（10世紀）に造られた、水に関わる祭祀を行うための土馬が日ノ池から出土しています。どうやら、日ノ池のあった所は古来から水が出る場所であり、水にかかわる祭祀を行っ

た「聖地」であったようです。

このような遺物の出土から、日ノ池が単なる「貯水池」であるだけでなく、神聖な空間でもあった可能性が浮かび上がってきます。おそらく、二つの井戸は直接池から水を汲み上げずに生活水を確保するためのものとして、池は戦勝祈願や雨乞いなどの儀式に使うためのものとして「使い分け」ていたのではないのでしょうか。



日ノ池で見つかった土馬
築城以前、水にかかわる祭祀が行われていたことを物語る遺物です。



日ノ池調査時
池の周囲は石敷きの平坦面が巡っていました。



石組み井戸址
池の北東側と南西側では、石組み井戸址が見つかりました。

月



13

もうひとつの池—月ノ池

山頂近くの「日ノ池」のほかに、大手虎口の入口にはもうひとつの池「月ノ池」があります。この池も日ノ池同様、石垣と石敷きに囲まれた池であったことが、発掘調査で明らかとなりました。

この月ノ池も、長い籠城に耐えられるよう生活水を確保するための「貯水池」であると考えられます。「月ノ池」の名称は、日月信仰との関わりで付けられたものであると

言われていますが、詳しいことはわかっていません。ちなみに『元禄太田金山絵図』の中では「日ノ池」を「大池」、「月ノ池」を「小池」と記述しています。また、現地の古老の話によれば、「日ノ池」を「太郎池」、「月ノ池」を「次郎池」と呼んでいたこともあったようです。

ところで、月ノ池は通路脇に立地していることに、ふと気がつきます。日ノ池も同様、通路の脇にあるため、私たち

は二つの池を歩きながら目にすることになります。見られる位置に二つの大きな池を造ることで、訪問客に「水が豊富で長く籠城することができる堅固な城である」ことをアピールしているかのようです。



調査前の月ノ池



月ノ池調査時

日ノ池と同様、周囲に石敷きの平坦面をもつ池であることがわかりました。



古い時期の石垣

月ノ池では、古い時期における池の石垣が見つかりました。これにより、月ノ池が改修を受けていることがわかりました。

第2期整備予定地



史跡金山城跡ガイダンス施設

その後の調査・整備

金山の駐車場（モータープール）手前の東屋から西側についての発掘調査や整備事業については、平成16年度から2期整備事業として引き続き調査・整備を実施しています。

駐車場のすぐ北の西城域の発掘調査では、西側において南北方向の筋違い土塁が確認されましたが、東側については建物等の遺構はありませんでした。整備としては、この曲輪部分に広場整備を行なうとともに南側の筋違い土塁の自然崩落を防止するための盛土工事を実施しました。

西城よりさらに西側に位置

する見附出丸における発掘調査では西城の西側で確認された筋違い土塁と同じような土塁が確認されました。これらの土塁についても、崩れてこないように盛土するとともに説明版の設置を行なっています。この場所に立つとその展望の良さから重要な地点であったことが想像されます。



盛り土状遺構出土の永楽銭と鉄砲玉



西城 盛り土状遺構の断面



西城 筋違い北土塁



西城の広場整備



西城から実城への圍路整備



西城筋違い南土塁整備状況



体感

体感

史跡金山城跡ガイダンス施設では、金山城の歴史に触れ、金山の各所で見られる地形の変化や石垣、堀切、土塁などについての理解を深めていただくとともに、散策を通して歴

史的な体感をしていただければと考えています。また、歴史ばかりではなく、その立地から見た眺望のすばらしさや、残されている自然についても四季おりおりにふれ、五感で感じていただければ幸いです。

太田市教育委員会 文化財課
〒370-1495 群馬県太田市粕川町520
TEL.0276-20-7090 FAX.0276-52-6080

